

理想への「歎き」と「ねがい」

——齋藤勇の Shelley 講義ノートに見られる後年の文学論の萌芽とその差異——

木 谷 巖*

シノプシス：新たに発見された齋藤勇の講義ノート群のうち、“Poetry of Ideality: A Study of P. B. Shelley”と題された2冊(1917-18)において、齋藤は Shelley に内在する理想への希望と絶望の絡まり合いを「求めて得ざる歎き」という言葉で表現している。150ページ以上を費やして論じられる齋藤の Shelley 観には、のちの『星を求める蛾のねがい——青年の文学』(1956)、さらには『文学の世界(文学概論)』(1958)第6章「静観の文学」における“lyrical cry”をめぐる考察のような、いわゆる齋藤文学論の萌芽がみられる。しかし、今回のノートにみられる「求めて得ざる歎き」は、齋藤後年の文学論において、より教科書的に簡略化されているともいえる。本稿では、この講義ノートの紹介を通じて、上記のような概説からこぼれ落ちる細部のなかに、若き齋藤特有の Shelley 観および文学観を見出すことを目指す。そのための議論はおもに以下の3点に集約される。1) 講義ノートの成立過程を紹介することを端緒として、ノート第4章における理想主義と懐疑主義のはざまで揺れ動く Shelley の葛藤をめぐる記述とその研究的意義について考察する。2) つづいて、*A Defence of Poetry* を論じたノート第9章と結論、補遺にあたる部分に着目し、Shelley のロマン主義にみられる道徳性あるいは道徳的情操、そしてそれを学ぶことの重要性について齋藤がいかに論じているかを紹介する。3) 最後に、この Shelley 講義ノートのなかに挟まれていた別紙——こちらも新発見の資料である——の読解をつうじて、当時の齋藤が抱いていた——後年の著作ではほぼ語られることのなかった——文学を通じた英語教育観と政治的意識が垣間見えたことを報告する。

キーワード：齋藤勇；英詩講義ノート；Percy Bysshe Shelley；*A Defence of Poetry*；lyrical cry；理想主義；懐疑主義；道徳教育；文学；英語教育；政治的意識

【序】講義ノート“Poetry of Ideality: A Study of P. B. Shelley”の成立過程と本論の目的

まずは、今回新たに発見された齋藤勇講義ノート群(以下「齋藤ノート」)における Shelley 論全2巻“Poetry of Ideality: A Study of P. B. Shelley”(1917-1918, 以下「Shelley ノート」)の生まれた背景を整理することから始めたい。¹ Shelley ノート冒頭には英語の題名とともに「シェリの詩及び思想——1917年から翌年まで——東大英文科講義原稿」と日本語が付されている。このノートの執筆時期を最初に確認しつつ、齋藤勇の著作集のなかにこの資料をどのように位置づけることができるかを説明する。

齋藤の自叙伝的エッセイ『わが道』(1970)によれば、東京帝国大学文科大学(英吉利文学専修)に入学後、齋藤は英語学者 John Lawrence (1850-1916) の講義をつうじてイギリス・ロマン派の長詩を重点的に学び、卒業論文では Tennyson の作家論について研究した。²その後、*Life of Shelley* (1886) の著者としても有名な Edward Dowden、シェイクスピア研究者の A. C. Bradley、そして英国の文芸雑誌 *Spectator* の主筆を務め、19世紀の詩や小説について多数の論文を残したジャーナリスト Richard Holt Hutton らに私淑したという(『著作集』別巻453, 455)。³ 1911年(明治44年)、東大を卒業後、同年東京帝国大学大学院へ進学し、東

* 帝京大学教育学部准教授

京帝国大学文科大学の講師嘱託(1913年から1923年まで)を経て、1923年、東京帝国大学文学部助教授に転任し、その直後、文部省在外研究員としておよそ2年間のイギリス留学(ヨーロッパ出張)を命じられている(『著作集』別巻 463-64)。⁴今回発見された齋藤ノートには、前述の批評家やジャーナリストの名前も頻出するため、上記の嘱託講師時代に書かれた講義ノートであると考えられる。

つづいて、このノートと現在刊行されている『斎藤勇著作集』(1975-1978)とのつながりについて紹介したい。この Shelley 論はいくつかの著作に部分的に重複する箇所はあるものの、本邦初公開の講義ノート(あるいは著書原稿)とみなして間違いはない。⁵齋藤は同じ著作を何度も改稿・改訂したことで知られているが、それらは歳月を経て洗練され、いわゆる齋藤文学論へと熟成されていった。そして齋藤ノートには、その文学論の原型を見出すことができる。実際に齋藤文学論の集大成のひとつ『文学の世界』序文では、この著作が1922年度の東京大学英文科における文学批評の原則についての講義用ノートがもとになっていると記されている。この言葉の証人となるのが、齋藤の弟子にあたる大和資雄(1898-1990)である。『文学の世界』が出版された1958年、『英文学研究』誌上において、この著作の書評を寄稿した大和は、『文学の世界』の出典について、下記のように述懐している。

本書〔『文学の世界(文学概論)』〕は稿を起されてから少くとも35年以上も推敲され増補されて、初めて出版されたものなのである。大正十一年〔1922年〕に私は東大の赤煉瓦の教室で斎藤先生の“Paradise Lost”と“Some Principles of Literary Criticism”という講義とを聴いた。後者については断片的に「英詩概論」(昭和10年)の緒言その他に発表されているが、全体としては今度初めて出版された。その頃のノートは皆戦災で焼け失せたが、主張はこのたびの著書とそっくりであり、引例も“*Oh, the wild joys of living!*”以下の詩句など幾つか同じものがあつたと記憶する。⁶ (大和 333-34)

齋藤、大和両者の証言に従えば、『文学の世界』は、1958年に出版されるまでのあいだ大正時代以来「推敲と増補」を重ねた齋藤の講義ノートがもとになっている。しかし、今回新たに発見されたノートによって、名著『文学の世界』の萌芽は齋藤と大和が振り返る1922年よりもさらに5年ほど遡ることができるということになる。

Shelley ノートの内容について具体的に論じる前に、ノート目次の章立てをみることによって講義の全容を確認する。ノートの構成は下記のとおりである。

CONTENTS

Bibliography	1
第一章 <i>Alastor</i>	8
二 <i>Hymn to Intellectual Beauty</i>	18
三 <i>The Revolt of Islam</i>	25
四 求めて得ざる歎き	45
五 <i>Prometheus Unbound</i>	53
六 <i>Prometheus Unbound</i> と共に出版せられたる詩及び <i>The Cenci</i>	78
七 <i>Epipsychidon and Adonais</i>	95
八 <i>The Triumph of Life</i>	118
九 <i>A Defence of Poetry</i>	140-156

目次冒頭にある“Bibliography”では、現在も Shelley のテキスト校訂研究においてたびたび参照されるような、時代の先端をゆく一次資料が紹介されている(SN-Sh1:1-6)。⁷この講義が当時のもっとも新しいテキストを参照する、力の入ったものであったことがうかがえる。

この新ノート発見の意義については、以下のような説明が可能である。齋藤後年の著作には、Shelley の詩的特質がどちらかという教科書的に簡略化されたかたちで織り込まれている。したがって、のちの齋藤文学論における Shelley の詩的特徴の概説的な説明からこぼれ落ちる細部に眼差しを向けることによって、1917-18年当時の齋藤特有の Shelley 観を浮かび上がらせることを試みる。Shelley ノートのうち、おもに2つの章、第4章「求めて得ざる歎き」(SN-Sh1:40-52)、第9章「A Defence of Poetry」(SN-Sh2:140-56)、および別紙(本講義ノート執筆時の覚書)に焦点を絞り、これらを後年の齋藤文学論と比較しながら紹介することで、Shelley のロマン主義にみられる理想主義と懐疑主義の葛藤、また、道徳性(道徳的情操)とそれを学ぶ意義について、当時の齋藤がどのように論じているかを報告する。最終的に、新ノートの発見を通じて、これまでの齋藤のイメージ——伝統的、王道のかつ超然とした、あるいは〈非政治的〉な英文学者像——とは異なる一面、若き齋藤にみられる政治性にあらたな光をあてることを試みたい。

[1] 「求めて得ざる歎き」から「星を求める蛾のねがい」あるいは「抒情的詠嘆(lyrical cry)」へ

Shelley ノート第4章を論じるにあたり興味深いのが、ノートの目次において第4章だけ作品名ではなく「求めて得ざる歎き」という観念がタイトルになっているという点である。これは本ノートの題名“Poetry of Ideality: A Study of P.B. Shelley 1917-1918”にも深くかかわる。齋藤によれば、「求めて得ざる歎き」とは Shelley に内在する理想への希望と絶望の絡まり合いを意味しており、実際にノートでは Shelley は「絶えず the infinite を求めて得ざる歎きを痛切に感じていた」と記されている(SN-Sh1:46-47)。詳しい説明として下記の文章を引用する。

併し Shelley の dejection は彼の心の全部でなく、更に高きものに達する一階段である。そうしてこの求めて得ざる歎きは ideality の人にあるべき沈痛な声である。而して R. H. Hutton [Richard Holt Hutton, 1826-1897] も言ったように Shelley の詩は “poetry of desire” (*Literary Essays*, “Shelley and His Poetry,” p.148) であり、彼は常に “homo desideriorum” (ib.) である。彼は断えず飢え渴いている。彼の詩には殆んど感謝なくして求めるばかりである。Wordsworth にも the Infinite に対する感じはあった、むしろ Shelley よりも多くあったろうが、彼は与えられた者の価値をも認めつつ進んだ。Wordsworth は建実な態度をとっているが、それだからとて Shelley を微力無用だとは言えない。豚の如き満足に生きる者、誰か

We look before and after
And pine for what is not:
Our sincerest laughter
With some pain is fraught;
Our sweetest songs are those that tell of saddest thought.

(To a Skylark (1820) ll. 86-90)

の歎あるを得よう。安価な知足の心と低級な飽満に安んずる人は、到底浅薄たるを免れない。而して Shelley に対して求めて得ざる歎きを禁ずるは、彼をして bourgeois たらしめることに過ぎない。彼にこの心あればこそ彼の如き理想詩を作り得たのである。Ideality は求めて甘んずる心に非ずして、求めても求めても安んぜず休まざる心である。理想追求の人に何処か沈み勝ちな所あるは、當然の事である。深き喜びは惨ましき悲みを経て来ると知らずや。(SN-Sh1:49)

引用部で提示されているような、理想的な美や善(すなわち *ideality*)を渴望する詩人 Shelley というイメージは、およそ40年後に書かれた『文学の世界(文学概論)』第6章「静観の文学」における“*lyrical cry*”すなわち「抒情的詠嘆」をめぐる考察のなかに生きている。⁸ 齋藤は、上の引用と同じくヴィクトリア朝の文芸批評家 Richard Holt Hutton (1826-1897) を参照しながら、Shelley の詩における「抒情的詠嘆」について解説している。

そのほか、ハットンとともに、シェリの詩にこの詠嘆(抒情詩的詠嘆)が多いことを論じ、またローリ教授〔Sir Walter Raleigh, *English Novel*, 1894〕とともにゴドウィンおよびシェリの浪漫的小説中に自由を求める抒情詩的詠嘆を認めることができる。これらの用例はいずれも、‘*lyrical cry*’ が抒情詩の精髓であることを示す。念のためその例証として Shelley の一句を引用してみる――

The desire of the moth for the star,
Of the night for the morrow,
The devotion to something afar
From the sphere of our sorrow. (‘One word is too often profaned’, 13-16)

星を求むる蛾のねがい、
曙を待つ夜のおもい、
この悲しみの世界より
遙けきものへ献ぐる心。

これはシェリが覆面せる乙女(‘*veiled maid*’)に対してあこがれ、知的な美(‘*Intellectual Beauty*’)を求め、また魂の分身(‘*Epipsychidion*’)に魅せられて、

We look before and after,
And pine for what is not. (*To a Skylark*, 86f.)

前を見わたし、うしろを顧み、
今なきものにあこがるるかな。

と叫んだのと同じ心の表現である。彼は渴望、憧憬、探求の詩人である。そして彼の詩には求めて得ざる悲しみを表すとき、まことに情熱のこもった言葉が多い。それでシェリの場合には、‘*a lyrical cry*’は限りなきものに対する浪漫的なあこがれであると言ってよい。この意味において彼の詩はいわゆる純粋詩(*pure poetry*)となる。およそ大文学は人間の無限性の展望を与えるものであろうが、彼の詩は無限な世界への瞥見を与える。そしてシェイクスピアの作に比べれば、取材範囲は狭いけれども、シェリの抒情的詠嘆はシェイクスピアのそれに劣るものではない。(『著作集』1:152)

先に紹介した Shelley ノートの文章と比較すれば、上の文章には明らかに文学論的な洗練が見られ、Shelley ノートでの「求めて得ざる歎き」は「求めて得ざる悲しみ」と言い換えられている。しかしここでは、悲しみを表す「情熱のこもった言葉」の説明が、「‘*a lyrical cry*’すなわち「限りなきものに対する浪漫的なあこがれである」といったように、明解な術語を用いた解説を通じて端的にまとめられている。そこでは、かつての「深き喜びは惨ましき悲みを経て来ると知らずや」という「歎き」と「喜び」の表裏一体的な特徴の説明が消えて、遥かなる「無限な世界」への憧れに置き換えられているといってよい。このような文学論的变化はもう1冊の書『星を求むる蛾のねがい——青年の文学』(1956)にもみられる。こちらは文学論というよりも当時の大学生向けに書かれた随筆集であって、実際に文学部の学生を中心によく読まれたという。

やはりタイトルの通り、さきほどの「星を求める蛾のねがい」の詩が引用され、下のように語られる。

理想の實現に一生を獻げようとする青年には、月に梯子をかけようとするこゝも、光を求めて星の世界まで飛んで行こうとする蛾の願いも、途方もない妄想ではない。それは命懸けの切望であり努力である。〔中略〕特にシェリの句“The Desire of the moth for the star”は、情意のあこがれを基調とするロマンティズムの特色を最もよく言い表したものである。そして青年時代にはこの浪漫情緒がゆたかであることが望ましい。(『星を求める蛾のねがい』6, 8)

この2つの例から以下のような事実が明らかになる。Shelley ノートの「求めて得ざる歎き」が、のちの齋藤文学論において Shelley の「抒情的詠嘆」(“lyrical cry”)という「情意のあこがれを基調とするロマンティズムの特色」として教科書的に簡略化されたことで、「求めて得ざる渴き」の「得ざる渴き」の部分、つまり真理や理想の追求にともなう絶望、懐疑的な側面が抜け落ちてしまったという事実である。

ここで再度 Shelley ノートに戻り、若き齋藤が Shelley の詩的特質としての絶望や懐疑についてどのように述べているかを詳しく見てゆく。先に引用した文章の後、齋藤は“Everlasting No”を経験しなければ、“Everlasting Yea”に到達することは出来ない」と述べている(SN-Sh:1-50)。さらに齋藤は、かつて Matthew Arnold が Shelley を “beautiful and ineffectual angel” と形容したことに触れつつ、たしかに Shelley の詩には “reality” に乏しく、“lovely wails”(「美しい歎き」)に過ぎないように感じられる場面も見られることは認めている(SN-Sh:1-50)。しかしながら、そのように空疎な美を生み出す想像力が Shelley の詩的本質であるという「誤り」は、下記のように徹底的に反論されている。

併しこの敏感多感の性質あるが故に、他を顧みずして Shelley を女性的だとか、ineffectual angel だとか、餘りに空想的だとか、或いは Ruskin のように Shallow and verbose だとか言い棄ててしまうのは、謂われなきことである。勿論 Shelley の革命思想には、前に一言したように誤りがある。又その人類将来の発達に関する思想は徒に修辞を弄したような貧弱な内容であること一再に止まらない。[cf. Dowden, *Transcripts and Studies*, p.94.] けれども Shelley が唱えた愛と自由と美との理想追求熱は鉄をも鎔かすべき勢いである。加え、彼には一寸不思議な程実行の才能があった。故に彼は効(かい)もなく空を搏って羽ばたきせる ineffectual angel に非ずして、むしろ

one who from some mountain's pyramid
Points to the unrisen sun. (*Revolt of Islam* IX vii)

である。新時代の曙光を指示せるは、決して ineffectual でない。(SN-Sh1:51)

引用部分では、齋藤が評価する Shelley の詩的美質は、現実世界の醜悪さを見据えたうえでそれに立ち向かう気概と努力にこそある、と強調されている。また、この点を論じるにあたり、齋藤は自説を補強するために Henry Noel Brailsford (1873-1958) や Francis Thompson (1858-1907) といった19世紀後半のイギリスで活躍した批評家の言葉を引いている。

加え、H. N. Brailsford (*Godwin, Shelley and their Circle*, p.220) も言っているように、この目のくっきりした、義憤に熱く、邪惡に書〔欠〕ける、美しい天使が下り立った世界は、決して void でなかった。それは常人ならば平気で見過ごしにするだろうが、理想ある者は断えざる苦痛の種なる壓迫と頑冥と暗愚と因習と苦痛と悲哀との充ち満てる醜惡な世界である。彼もしここに翼を搏ったとすれば、それは束縛の籠を脱して無際限の天空にかけ行こうとする努力である。されば F. Thompson が Shelley を

“Enchanted child, born into a world unchildlike; spoiled darling of Nature, playmate of her elemental daughters; “pard-like spirit, beautiful and swift,” laired amidst the burning fastnesses of his own fervid mind; bold foot along the verges of precipitous dream; light leaper from crag to crag of inaccessible fancies; towering Genius, whose soul rose like a ladder between heaven and earth with the angels of song ascending and descending it” (Shelley, p.75; Works, III 36) と称したのは、流石に深い洞察である。

要するに Shelley は “The proper study of mankind is man” (Pope: *Essay on Man*. II . 2) とか、未だ生を知らず焉んぞ死を知らんやとか言って、納まりていることの出来る者でなかった。故に限りなきを追うの餘り、悲歎に与ることがあったにせよ、それは偶々彼の ideality が醇なものであることを証するのである。(SN-Sh1:52)

引用の文章は、絶望あってこそその理想という Shelley の詩に対して導き出した見解を明らかにすると同時に、若き齋藤が19世紀および20世紀の詩人、批評家、研究者の著作を幅広く読んでいたことも示唆している。このような希望と絶望、理想主義と懐疑主義のあいだを往来する Shelley のイメージ——Thompson の言葉を借りれば “rose like a ladder between heaven and earth with the angels of song ascending and descending it”——は、おそらく Hutton や Brailsford、そして Thompson といった、現在の英文学研究ではほとんど忘却されてしまっている19世紀のイギリスの詩人や批評家、文筆家のあいだで共有されていた言説（認識の枠組み）であろう。別言すれば、この Shelley ノートのなかに当時の英文学研究における批評的関心がアーカイブ化されている、ということになる。また、これを、齋藤が当時のイギリスにおける Shelley をめぐる批評言説を正確に理解していたことの証左とみなすことも可能であろう。

Shelley の詩における絶望や諦念 (scepticism) の思想は、20世紀以降も英米の Shelley 研究において、Earl R. Wasserman や Stuart Curran などによって脈々と受け継がれていった。⁹ とくに、Wasserman の *Shelley : A Critical Reading* (1971) 全体で展開される、Shelley の「詩的精神 (“poetic mind”)」における idealism と scepticism (skepticism) の相克にかんする議論などは、Shelley の詩をより精緻に分析することによって、齋藤の講義ノートの議論を補足説明したものといっても過言ではない。希望と絶望のあいだを往来する詩人 Shelley という、若き齋藤による解釈はのちの齋藤文学論の基礎となるが、先に言及したとおり、絶望の側面の方が、その文学論的洗練のなかで失われてしまった（くしくも、この絶望をめぐるテーマは、1970年代から1990年頃にかけてディコンストラクションが席卷した北米のロマン主義研究においてふたたび脚光を浴びることになった）。¹⁰ Shelley の研究史的な観点から言えば、20世紀前半に書かれた齋藤の講義ノートで説明される詩人の希望と絶望というテーマを補助線とすることによって、19世紀のイギリスおよび20世紀後半のアメリカの Shelley 研究においてたしかに存在していた sceptical idealism の系譜が浮き彫りになる。このような批評家、研究者間の共通認識を明らかにし、現在の研究では Shelley の sceptical idealism と呼ばれている観念に対して、100年前の時点において「求めて得ざる歎き」と名付け、講義において詳しく説明したという事実からも、若き齋藤のすぐれた才能と独自性を推し量ることができよう。

[2] 『文学の世界』第4章の元になった Shelley ノート第9章「A Defence of Poetry」

ここまで、若き齋藤の Shelley ノートにみられる、後年の文学論では簡略化されてしまった「求めて得ざる歎き」のテーマについて論じてきた。ここからは、齋藤が終生失うことがなかった批評的関心、詩と道德の関係について、その解釈の特徴とともに説明したい。

講義ノートの後半において、齋藤の関心は Shelley における理想主義と懐疑主義の葛藤をめぐる議論から、詩と道德をめぐるそれへと移る。それがノート第9章「A Defence of Poetry」（『詩の擁護』）論であり、それは齋藤の Shelley ノートにみられる『文学の世界』の萌芽となるもうひとつの重要な主題である。『文学の世界』

第4章「文学と道德の関係」では、文学内(想像的)世界における追体験が道德的情操(快感)を生み出すこと、また、そこから副次的に道德的改善の効果をもたらすこと、とはいえそれが良い文学作品の条件ではないことなどについて議論がなされている(『著作集』1:91)。この議論については、Shelley ノートにおける *A Defence of Poetry* をめぐる議論にその萌芽が見られる(『著作集』1:90-91)。他にも具体的な論の展開を比較してみても、Shelley ノート第9章(とくに SN-Sh2:142 から SN-Sh2:154 にかけて)が『文学の世界』のプロトタイプであることは明らかである(『著作集』1:97-113)。もちろん『文学の世界』のほうが——増補され、引用される詩句の例も増えているという理由もあり——、より精緻な議論が展開されている。ただし、文学がその読者に道德上悪影響を与えうる例の紹介、およびそうした例の分類などは、両テキストにおいてほぼ同じ枠組みで論じられる。その分類を大まかに説明すると1)性的に不道德、煽情的な詩(Wilde など)、2)感情の鋭敏な思春期の読者には思わぬ肉感をそそりうる詩(Keats など)、3)道德的影響を意識した作品ではなくとも、いわゆる文学少年少女を感傷的かつ意志薄弱にしてしまうような詩(Wordsworth など)、そして4)旧来の道德観を偏狭で因習的なものとして、それとは別の新たな道德的理想をみずから主張する詩といったものである。齋藤の考えでは、Shelley の詩は最後のカテゴリーに位置づけられる。

このように、『文学の世界』が Shelley ノートの第9章「*A Defence of Poetry*」よりも文学論として洗練されているのは間違いない。しかし Shelley ノートは、「詩(文学)は役に立つか」というより現代的な問題に正面から取り組んでいる。そこには『文学の世界』には見られない切実さがある。これはなぜか、という問いとともに Shelley ノート第9章を読み進めてゆく。

以下、詩が道德面で有益な効果をもたらすという Shelley の論を齋藤がどのように説明しているかを追ってゆく。Shelley ノートにおける *A Defence of Poetry* 論は、「歓び(“pleasure”)」と道德性の涵養という点を強調しながら次のように始まる。

この論文〔*A Defence of Poetry*〕は凡そ五つの部分から成る。第一に、詩を想像の表現として推理力と異なれる心的作用の所産となし、これを表わすに *rhythmical language* を以てすと言ひ、次に、詩の効用は“pleasure”を与え、且つ道德上の改善に資するにありと断言して、ギリシヤ、ローマ以来 Dante, Milton に到る詩人について例証し、第三に、詩が科学や政治哲学に優れるを認め、第四に、再び詩の効用を考え、且つ詩と詩人との関係を論じ、最後に、この論文が Shelley の友 T. L. Peacock の *The Four Ages of Poetry* に対する辯駁として書かれたものなること及び近世詩歌の価値を論ずる計画あることを述べ、詩人の本領にもう一度論及して擲筆している。(SN-Sh2:140)

この詩論が書かれた背景であるが、引用部において反駁の対象として挙げられている *The Four Ages of Poetry* (1820) が Peacock によって風刺的な意図で書かれたものであるとはいえ、Shelley の生きていた1820年の時点で、すでに詩の黄金時代は去り、役に立たないものとして消えゆく立場にあるという言説が存在していた。詩が世の役に立たないという言説は、(これ自体プラトン以来の普遍的な言説ともいえるが) 齋藤の生きた時代にも当てはまる。これをもとに、齋藤は詩(文学)のもつ道德的な役割について語る Shelley の言葉を手際よくまとめ、「詩人たる者教訓談をしてはその効を失うが、真の詩は倫理学や修身書よりも一層有効に人を善ならしめるものだと言っている」と書いている(SN-Sh2:141)。

しかし、なぜ詩の「歓び(pleasure)」が「倫理学」や「修身書」にまさるほどの道德的効果をもたらすと Shelley は断言するのか——この点について齋藤は縷々と述べている。「世の中における非公認の立法者(“unacknowledged legislators of the world”)」としての詩人という、*A Defence of Poetry* におけるもっとも有名なフレーズを引きながら、齋藤は、詩がほんとうに実生活の基礎となりえるものであるのか、という問いから考察をはじめ、その過程において、詩が人生の最大の目的という芸術のための芸術といった考え方よりも、道德が詩に先立つという考えを認めている(SN-Sh2:149)。

むろん、実生活においても詩よりも道德が先立つことは否定できない、という考察だけで齋藤の議論が終

わることはない。実生活 (reality) において詩が道徳に勝る (と Shelley が考えていた) 点について、齋藤はさまざまな喩えを用いて解説している。そこで強調されるのは、道徳と詩をつなぐ役目を果たす想像力の効果、すなわち、詩人の想像力が描き出す非現実世界とそれがもたらす感動である。

詩を作るよりも田を作れと言ったり、詩や小説のような軟文学を見向きもせぬ実業家、或いは十七字や三十一文字もしくは七言絶句などを併べることは併べるにしても、それが一向詩的感興に動かされてすることではなく、只 vanity のためにする御役人などで、相當に尊敬され又尊敬に値する人もある。つまり実生活に於いては、道徳はどうしても避けることの出来ない、當然守るべきものであるが、詩はあるに越したことがないにせよ、いやならば無くとも済むものだということになる。

こう言えば、詩の愛好者は我々を道徳に囚われた物或いは bourgeois だと罵るかも知れない。そして貴様は “unacknowledged legislators” たる詩人の天職を否定するつもりかと叱咤するかも知れない。併し詩はどうしても直接実生活を動かすものでない。加え、詩の永久性、何物にも拘束されない自由、実生活が示し得るよりも更に多くのものを示す力は、詩の遊離性抽實性からこそ生じているのである。道徳は実際の行為に関するものであるから、何か与えられたる事柄について観察を下し、且つその善悪を決する。詩は架空の事を取り扱い、且つ善悪を別ちて一を勧め他を懲らすを要しない。故に Shelley が “Ethical science arranges the elements which poetry has created, and propounds schemes and proposes examples of civil and domestic life: nor is it for want of admirable doctrines that men hate, and despise, and censure, and deceive, and subjugate one another.” (p.77) と言っているのは當然である。詩は実生活に於ける道徳的価値の大小如何には関らず、その折々の熾烈な情感を表現する丈でもよい。

(SN-Sh2:152)

この引用部をまとめると、「詩の本質的価値は実人生に於いて道徳のそれに及ばない」かもしれないが、「直接実生活を動かすものでない」詩はその「遊離性抽實性」ゆえに、同じく「何物にも拘束されない自由」と「実生活が示し得るよりも更に多くのものを示す力」をもつ。「詩は実生活に於ける道徳的価値の大小如何には関らず、その折々の熾烈な情感を表現する丈でもよい」のであれば、詩の想像力 (imagination) は実生活あるいは現実 (reality) から離れた架空の世界の美を描くことができるに留まらず、そのイメージがもたらす喜び (pleasure)こそ実践的な道徳論にはない美質である、ということになる。したがって、たとえ実生活 (reality) において道徳が詩よりも先立つとしても、勧善懲悪を切り離すことのできない現実世界の道徳にたいして、詩は想像力の翼によってその軛を逃れて現実以上に世界を美しく描くことができるため、結果としてその美がより豊かな道徳的な効果をもたらしうる、という主張が成立するのである。

もちろん、その際に陥ってはならない罣がある。齋藤によれば、それは道徳的教訓を主張するためだけに道徳と詩を無理に接合することである。それが問題となる理由は以下のように説明される。

彼 [Shelley] は道学先生が嫌いであつた。そして *Prom.Unb.* に序して “Didactic poetry is my abhorrence” と明言し、*The Cenci* を創作する自己の態度を記して、“There must also be nothing attempted to make the exhibition subservient to what is vulgarly termed a moral purpose” と言った詩人である。さて Shelley が詩の中に moral を入れることに反対した理由は何か。1) 道徳的思想は詩に於いてよりも散文に於いて一層よく表現されるから、何も詩にそれを言い表す必要がない。2) 詩の世界は本来永久不変なるべきに、詩人の道徳思想はその時代その国特有の一時的なものである。尤も Shelley は當時の道徳に抵抗したが、その抵抗の中には矢張り時代精神がある。3) 詩は想像的靈感から生ずるものであるから、詩の道徳的効果も推理 [おそらく理性を指す] によらずして想像によって起るものである。

(SN-Sh2:153)

上記の引用文において齋藤が挙げる2つ目の理由、「詩の世界は本来永久不変なるべきに、詩人の道德思想はその時代その国特有の一時的なものである」という指摘は興味深い。その理由について、齋藤は次の文章のなかで詳述している。

而して御説法風の教訓詩は概ねその時その国に普遍せる狭隘で stereotyped な道德であるから、詩人もこれに拘泥する時にはその想像が一向のびない。従って本来新たなるものの創造たる詩が手も足も出なくなってしまう。即ち [Poetry] awakens and enlarges the mind itself by rendering it the receptacle of a thousand unapprehended combinations of thought. Poetry lifts the veil from the hidden beauty of the world, and makes familiar objects be as if they were not familiar” (p.77) といった Shelley の言葉はうそになってくる。故に彼が詩人は道德世界の立法家を以て任すべきだと考えたらしい。或いは單に廣く社会の先覚者位の意味に於いて Legislator なる言葉を用いたものであろう。[中略]又、道德的理想をうたっていけないというのでもない。何となれば Didactic poetry を罵倒し去ると同時に “beautiful idealism of moral excellence” (Pref. to *Pr. Unb*) を読者に普ねく知らせるのが彼の目的だと言っているから。彼は “nothing can be equally well expressed in prose that is not tedious and supererogatory in verse” (Pref. to *Pr. Unb*. P.203) と言っているが、これを見れば、どうしても Shelley の嫌ったのは、詩が道德的効果を齎すことでなく、その効果を惹き起こすために説教をしたり、説明をしたりして、推理力に訴えることである。彼は、世人が喜び迎える与否とに拘わらず、己が理想を掲げて廣義の moral improvement を為すことを人としての詩人の本務だと言いながら、それを為るに詩人は詩人特有の方法を以てすべく、決して道学者を模倣してはならないと説き、且つ自らもこれを実行したのである。

(SN-Sh2:153-56)

齋藤によれば、一方で Shelley は詩と道德を無理やり結びつけることに対して、とりわけ教訓的な詩 (didactic poetry) に対して嫌悪感を示しながらも、他方で詩人特有の “beautiful idealism of moral excellence” すなわち想像力がもたらす感動などがきっかけとなって読者の道德的情操がゆたかになることによって、理想とされる社会の実現に向けて道德的改善が促進されると主張している。Shelley の詩的天才もまた、実生活における己の過ちを補って余りある理想的な道德的善をおこなった、というのが齋藤の結論である。

A Defence of Poetry さらには Shelley の “ideality” に関する若き齋藤の講義ノートの論旨は、おそらく次のようにまとめることができる。詩の道德的価値とは、「道德的改善 (“moral improvement”)」そのものを目的とするのではなく、想像力の美を通じた感動の結果として読者の道德的情操の改善に資する所にこそある。そして、道德のための詩というあり方に懐疑的である一方で、詩の道德に対する効能は信じる——こうした思考もまた「求めて得ざる歎き」という reality (scepticism) と ideality (idealism) のテーマに連なるものであるといえる。

A Defence of Poetry というエッセイの内容自体がもともと詩 (文学) の擁護を主たる目的としていたという背景もあるが、上記のように詩の有用性について語る齋藤の背後に見え隠れする熱意と現実味をおびた危機感——たとえば文学を無用のものとみなす実業家や虚飾のためだけに文学を利用する役人など、妙なりアリティをもった喩えはどこから来ていたのか——は、のちの『文学の世界』全体にみられるような、文学の価値を自明の前提とし、またあくまで主観を排そうとする、いわば無色透明な批評的態度とはかなり異なっている。Shelley ノートに込められた、詩あるいは文学の意義に関する切実なメッセージを、若書きならではの過剰な文学的情熱のあらわれ、といったような文脈に回収してしまうだけでは十分とはいえない。この点について、引き続き失意・絶望と希望の眼差しおよび詩と道德という観点から、Shelley ノート執筆当時の時代状況と照らし合わせながら考察したい。

[3] 若き齋藤勇の政治性と英語教育論

Shelley ノートのなかでは、*A Defence of Poetry* の紹介を通じて語られる詩と道徳の関係をめぐる齋藤の主張が、彼の実践した教育観や政治性とも結びついている。そのことを証明する手掛かりとなるのが、Shelley ノート最後のページに挟まれている別紙である。ノート1ページ分にあたるこの紙片の冒頭には「民衆芸術論」と書かれているが、これはおそらく本講義ノート執筆時における覚書(補遺)のようなものであり、そのなかに当時の齋藤の政治的態度と英語教育に関する考えが素描されている。初めに別紙の全文を紹介する。

民衆藝術論

詩の “message” –Flecker—Watts-Dunton. p.32

Tolstoy

Julius Ceaser—Brutus

EXTERNAL VALUE OF POETRY.

詩人が unacknowledged legislator であるのは、詩が想像感情に訴えるからである。

Cf. Speeches of Brutus and Anthony on the death of J. Caesar.

Macbeth が道徳的であったのは想像があった間丈。

詩の教育上に與える影響

人は極論 (ethics) で動くよりも感情で動く。

Kubla Khan の如く non-moral and purely fanciful な詩でも人生を豊富ならしめるから、我々の道徳生活に資する。

“he loves no plays,

As thou dost, Antony; he fears no music.” (J.C. 1 2 203f.)

“The man that hath no music in himself,

Nor is not mov'd with concord of sweet sounds,

Is fit for treasons, stratagems, and spoils;

The motions of his spirit are dull as night,

And his affections dark as Erebus:

Let no such man be trusted.” (Merch. of V. 5, 83-88. Lorenzo)

国家有事の時に詩を作ったり読んだりすることに対する反対を駁す

(Colvin ?) on Keats

J. S. Mill: “What made Wordsworth's poems a medicine for my state of mind was that they expressed, not mere outward beauty, but states of feeling, and of thought, coloured by feeling, under the excitement of beauty” (“Autobiography”)

Darwin [が] 小学校では classics に重きを置き、sciences を軽視したことを歎じているが、今日はもっ

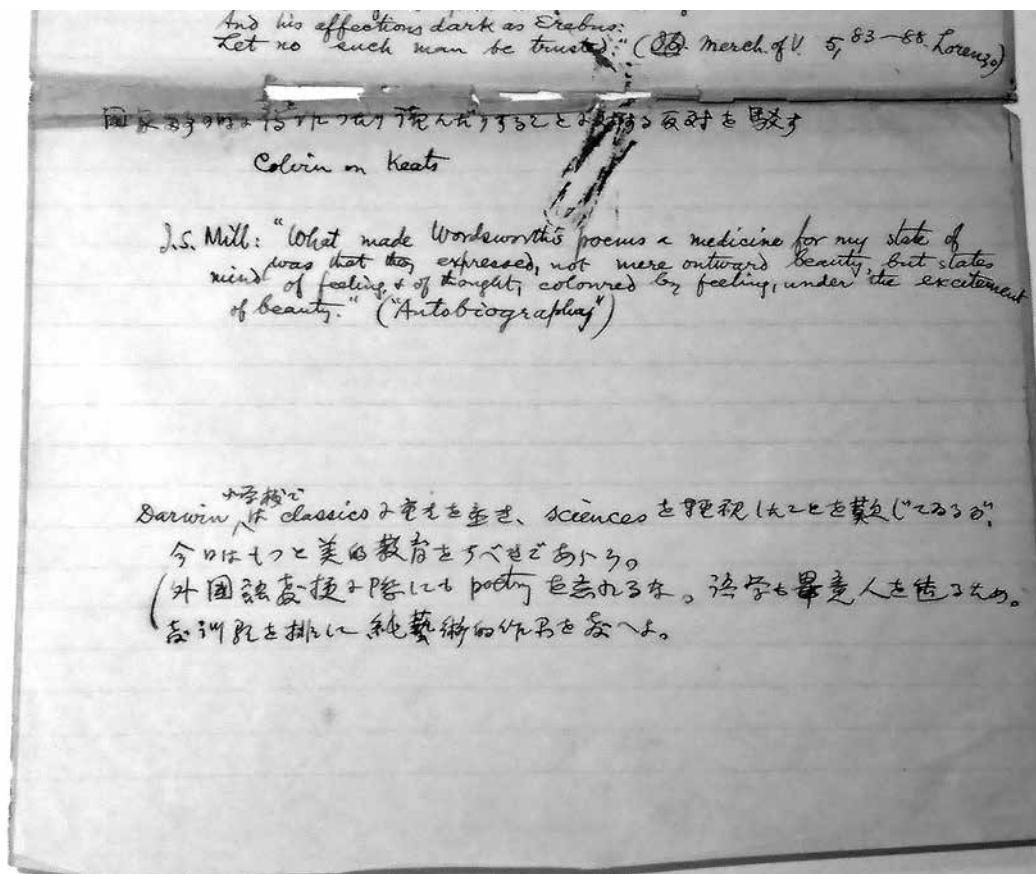
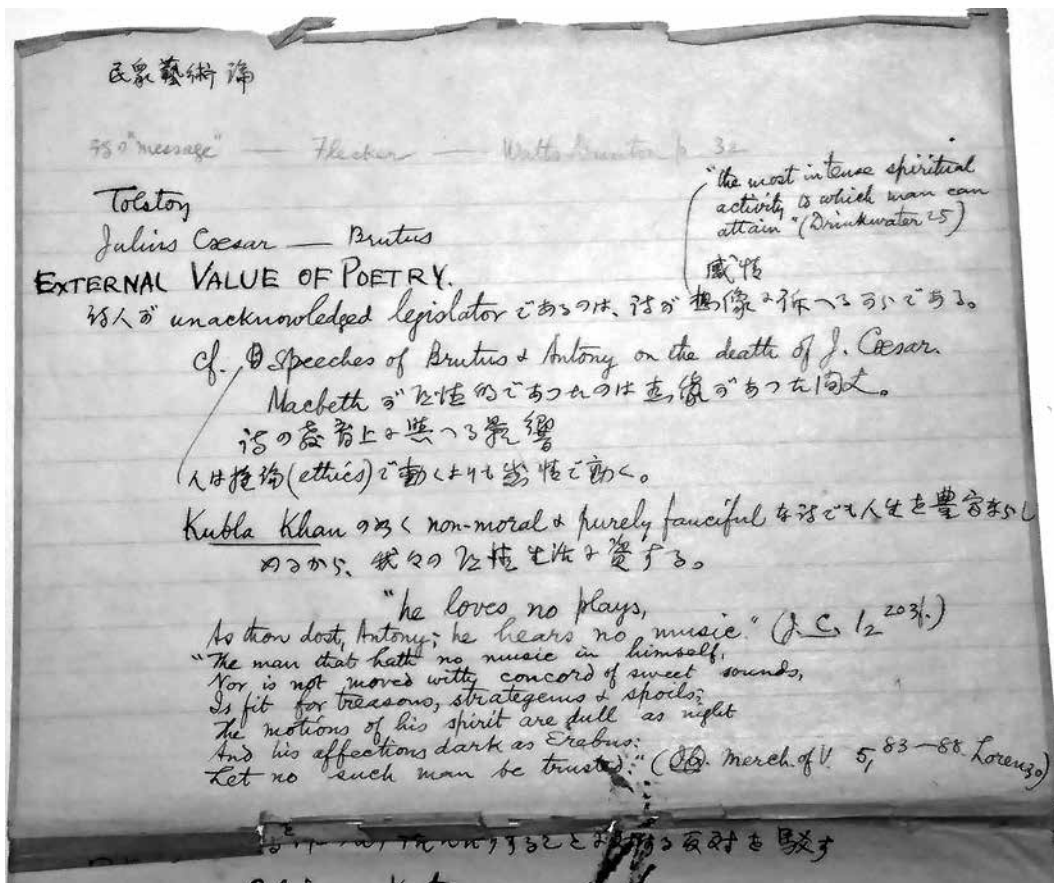
と美的教育をすべきであろう。外国語教授に際しても poetry を忘れるな。語学も畢竟人を造るため。教訓詩を排して純藝術的作品を教えよ。
(Shelley ノートに挟まれている別紙)

この覚書にみられる「詩の教育上に與〔あた〕える影響」、つまり詩が「我々の道德生活に資する」ということというのは、前章で確認したとおりの意見である。さらに注目すべきは、その直後に「国家有事の時に詩を作ったり読んだりすることに対する反対を駁す」という、齋藤としてはきわめて珍しい文言がみられる点である。このノートの執筆時、日本は第一次世界大戦に連合国側として参戦していた。さらに、Darwin を引きながら、「今日はもっと美的教育をすべきであろう。外国語教授に際しても poetry を忘れるな。語学も畢竟人を造るため。教訓詩を排して純藝術的作品を教えよ」と結んでいる。これは、教養英語、実用英語のいずれを重視するべきかをめぐり、齋藤の英語教育論として読める。

齋藤勇に対する現在の一般的なイメージといえば、これまでの講義ノートの紹介からもわかるとおり、謹厳実直でありながらきわめて控えめな態度——そこには社会や政治に特別関与しないリベラルヒューマニストとしての態度も含まれる——をもって研究に打ち込んだ伝統的・王道的文学者、といったものであろう。このような齋藤に対して批判的な意見もある。宮崎芳三は『太平洋戦争と英文学者』（1999）において「囲いの中の学問」と呼んだような、「世間」に対する「緊張関係」を持たず、「アッケラカンと世間から切り離されて」、ひたすら「熱心に勉強した」学者が齋藤であると論じている（143-44）。¹¹ 後年の齋藤の著作、たとえば『文学の世界』などを紐解けば、宮崎の語るような〈非政治的〉な学者としての齋藤のイメージに異論を覚える読者は少ないだろう。たしかに齋藤の自伝エッセイ『わが道』においても、その他の著作においても、第二次世界大戦について私見を述べた箇所は見当たらない。第一次世界大戦についても同様である。

しかし、先に引用した若き齋藤の覚書は、そうした世俗から隔絶された英文学者というイメージに対して、異なる様相を呈している。1917年から18年にかけて作成されたとされるこのメモには、戦争によって先行きの見えなくなった日本社会における英文学研究への、大学の英語教育における英米文学の境遇と行く末への憂い——あるいは「歎き」——を見出すことができる。もちろん、このような政治的、教育的態度を後年の齋藤もじつは胸に秘めていたという可能性がないわけではないが、既刊の著作を探るかぎり、また、『英語青年』の「齋藤勇氏追悼」号（1982年11月号）におけるかつての教え子たちの思い出を参照しても、齋藤による政治的な発言はまったく出てこない。おそらく後年の齋藤は、そのような話題について公言することを意図的に避けていたと推察される。¹² この意味において、引用の覚書を残した1917年当時の、若かりし頃の齋藤は、現在同じような苦境のうちにある日本の英米文学研究者の「歎き」と「ねがい」をある種先取りしていたとも考えられる。

以上のように、本稿は、新発見のノートを読み解くことで、1917年頃から後年の文学論へと論が洗練されてゆくなかで失われてしまった、Shelley の詩に内在する絶望や現実への眼差しを若き齋藤勇がどう捉えていたかを出発点として、齋藤が文学と道德の関係についてどのような見解を抱いていたか、さらに、そこに垣間見える若き齋藤特有の政治的態度や英語教育観について紹介した。かつては Shelley 的絶望へのまなざしと理想への憧れを同居させて詩を読んでいた若き齋藤が、年月とともに、詩の美しさとその憧憬について“lyrical cry”をもって若者に語る、われわれが現在イメージする英文学研究の泰斗としての齋藤勇へと老成してゆく過程の一部を露わにしているという点においても、齋藤勇研究、日本における英文学研究史を進めるうえで、この Shelley ノートは重要な発見であった。



注

- 1 以下このノートを参照する際には、それぞれ SN-Sh1, SN-Sh2 と略す。
- 2 齋藤によるロレンスの講義の回顧録としては、「ジョン・ロレンスとその遺族」(1976)という小文が残されている。そこでの説明によれば、Lawrence は文学研究者というよりも英語学者あるいは文献学者であったが、イギリス・ロマン派の詩の原文を精確に読み解き、評価する Lawrence の堅実な学術的姿勢は、日本におけるロマン派研究の礎となったという(『著作集』別巻 166)。
- 3 この当時、またそれ以前の時代における日本の Shelley 研究の動向については、原田、松田を参照。
- 4 『わが道』によれば、イギリス留学時代の齋藤は、1918 年と 1921 年のキーツ講義用原稿をもとに「詩に関するキーツの見解」(1925 年)——のちに *Keats' View of Poetry* (1929) としてロンドンで出版——を学位論文として執筆していたという(『著作集』別巻 438)。今回新発見された講義ノートが存在によって、この事実は証明されたと見える。キーツの講義ノートと著書の比較については笠原論文を参照のこと。
- 5 重複箇所のみられるおもな著作としては、研究社英文学叢書 *Select Poems of Percy Bysshe Shelley* (1922) のイントロダクション、『思潮を中心とせる英文学史』(1927)、『英文学史』(1938)、『イギリス文学史』(1957)、『文学の世界(文学概論)』(1958) などがある。
- 6 本論における引用文内の〔 〕はすべて筆者による補足を表す。齋藤による補足は[]で表す。
- 7 以下、例を挙げる。*The Complete Poetical Works of Percy Bysshe Shelley*, ed. Thomas Hutchinson (London: Oxford UP, 1904); *The Poems*, ed. C. D. Locock (Methuen, 1911); *The Poetical Works of P. B. Shelley*, ed. A. H. Koszul, 2 vols. (London: Everyman's Library, 1907); *The Prose Works*, ed. H. B. Forman, 4 vols. (1880); *The Letters of Shelley*, ed. R. Ingpen, 2nd ed., 2 vols. (London: Pitman, 1915)。
- 8 “lyrical cry”という語は、もともと Matthew Arnold がオックスフォード大学での講演において用いたものである(Arnold 60)。齋藤がこの語を最初に用いたのは次の箇所である。「この詩 [*Prometheus Unbound*] 全体について見れば、シェリの人類愛と自由にあこがれる熱誠とがあるために、この詩劇は最善の意味における “lyrical cry” (抒情的絶叫) となっている」(『著作集』1: 48)。
- 9 Stuart Curran は *Shelley's Annus Mirabilis* (1975) のなかで、Shelley の “skeptical idealism” について 1 章を割いている(95-118)。この “skeptical idealism” という語は、唯物論や心身二元論などの思想・哲学的側面から考察することも可能であり、その意味において Shelley は David Hume や William Drummond ら 18 世紀の哲学に影響を受けている(Doonan and Duffy, 861n)。
- 10 1970 年代以降の Shelley 研究の動向を、理想主義(idealism)と懐疑主義(scepticism)のせめぎ合いという観点から簡潔にまとめた論考については、宮本を参照。
- 11 後年の齋藤の研究姿勢について、宮崎は次のような背景があったと推測している。
私の考えでは、アカデミックな学問としての英文学研究をすすめる努力とは、つまりは本場のイギリス人学者に対しても通用する研究を生み出そうとする努力のことであり、当然のことながら、その英文学の研究が日本人によってなされたものだという特徴をうすくしていくのである。当たり前のことだが学問は国境を越える——少なくとも本質にそういう方向をめざす性質をもつ。そこには、学問研究者が自分の仕事に熱心であればあるほど、さいごにはその国籍を失ってしまうような方向にすすんでいく、という事情がある。
それにもう一つ実際的なことを言えば、当時の日本の社会状況を考えると、その中で学問研究をつづけようとすれば、重圧をもって押し寄せる目の前の状況から、どういう形であれ一歩でも距離をおいて離れたところにわが身を置こうとする傾向が研究者の態度に出てきても自然なことである。
(『太平洋戦争と英文学』46)
- 12 後年の齋藤による英語教育論としては『文学と語学との間』(1972)があるが、どちらかというと英語学習の話が主たるテーマであって、今回発見されたメモのように直接的な政治的見解は出されていない。

引用文献

- 齋藤勇『齋藤勇著作集』中野好夫、朱牟田夏雄、平井正穂編、全7巻・別巻1、東京：研究社、1975-78。
 ---『文学と語学との間』東京：ELEC 出版部、1972。
 ---『星を求める蛾のねがい——青年の文学』東京：南雲堂、1956。
 --- Introduction, *Select Poems of Percy Bysshe Shelley*, eds. Takeshi Saito and Kochi Doi, 「研究社英文学叢書」復刻版、

東京：研究社，〔1922〕1982, i-xxxiii.

---「“Poetry of Ideality: A Study of P. B. Shelley” シェリーの詩及び思想——1917年から翌年まで——東大英文科講義原稿」，1917-18.

「齋藤勇氏追悼」『英語青年』第128巻8号（1982年11月号），482-525.

原田博編『日本におけるシェリー研究文献目録』仙台イギリス・ロマン派研究会，1993.

松田上雄編『明治時代のP・B・シェリー文献——目録と抄録』私家版，2008.

宮崎芳三『太平洋戦争と英文学者』東京：研究社，1999.

宮本なほ子「Shelley 研究の動向」『英語青年』138巻6号（1992年9月号），23-24.

大和資雄「齋藤勇著『文学の世界』、研究社、昭和33年」『英文学研究』35巻2号，1958, 333-34.

Arnold, Matthew. *On Translating Homer: Last Words: A Lecture Given at Oxford. London*, 1862.

Curran, Stuart. *Shelley's Annus Mirabilis: The Maturing of an Epic Vision*. San Marino, CA: Huntington Library, 1975.

Shelley, Percy Bysshe. *Selected Poetry and Prose*. Ed. Jack Donovan and Cian Duffy. UK [London]: Penguin, 2016.

Wasserman, Earl R. *Shelley: A Critical Reading*. Baltimore: The Johns Hopkins UP, 1971.

謝辞

本研究は JSPS 科研費 18K12326 の助成を受けたものである。